

松下たえ子『ヴィルヘルム・ミュラー読本—— 「冬の旅」だけの詩人ではなかった』 (未知谷、2021年)

鈴木芳子

本書は、日本ではもっぱらシューベルトの歌曲の詩人として親しまれているヴィルヘルム・ミュラー（1794-1827）の生涯と作品、受容史を取り上げて彼の实像に迫る精緻な研究書である。若くして権威ある文芸評論家になった野心的な青年の人生行路を追いながら、当時の政治・社会・ジャーナリズム・文学的思潮などさまざまな観点から彼の諸作品を論じ、多面性のある詩人像を浮き彫りにしてゆく。

ミュラーはアンハルト・デッサウに生を受け、仕立て屋の息子として育ち、ベルリン大学哲学部に学籍登録する。ナポレオンのロシア敗退の報が入り、ナポレオン支配下に生きる人々の間で一気にドイツ解放の機運が高まると、ミュラーも義勇兵として参戦するが、1年半ほどで学生生活にもどる。古典文学の教授からいち早く将来を嘱望されていたものの、彼の目標は、「偉大な詩人」にして「文学の精髓に通じつつも堅苦しくない優雅な文学者」（30頁）になることだった。22歳で最初の詩集、『同盟の華』を刊行し、王立図書館の正式な司書の地位を直訴で得て、紀行ジャーナリズムの先駆けである旅行記『都ローマとローマの男女』（1820）を執筆し、「ギリシャ人の歌」（1821-26）で一世を風靡する。著者は、そんな詩人の独自の理想を求める彷徨を俯瞰し、『美しき水車小屋の娘』の第1曲の歌詞Das Wandern ist des Müllers Lust（遍歴するは粉屋の喜び）を踏まえて、「旅するはミュラーの喜び」と表現する。

本書の主眼は、ミュラーの生きた時代、救いのない時代に注意を向け、『冬の旅』を失恋した若者の自己憐憫の旅路などではなく、社会的で政治的なメッセージを背後に隠し持つ、「冬の時代」を描く文学として位置付けた点にある。1820年代の社会はメッテルニヒの精神に導かれ、旧体制に後戻りし、解放的な勢力はすべて麻痺状態にあった。著者によれば、『冬の旅』はよそ者として疎外感を抱き、自尊心が強く、社会に批判的な視線を向け、市民的な夢や安らぎと決別する人間の実存的苦しみをいち早く言語化した作品である。

また松下氏は、『都ローマとローマの男女』における「芸術は時代を形成できない、しかし時代は芸術を形成する」という有名な文言を取り上げ、「ギリシャ人の歌」には「芸術が時代を形成する」ことへの願望が見られると記す。しかしながら時代と直結した、時代の花である芸術は時代と運命を共にする。すなわち、「ギリシャ人の歌」や男声合唱団リーダーターフェルの酒宴の歌のような政治的シャンソン、政治的風刺詩はその政治的、社会的風土のなかでこそ花開くものであり、その風土が失われると、凋落を余儀なくされ、名声も衰微する。時事問題を扱った作品は大衆の強い興味を呼び起こすが、時の流れと共に精彩を失い、い

つしか忘却の淵にせずんでゆく。

さらに氏は、詩作品と音楽が結びつくことの功罪を説示する。音楽ゆえに世人に親しまれるいっぽうで、大切な要素が原作の詩からこぼれ落ちてしまうのだ。例えば、『美しき水車小屋の娘』はサロンの歌芝居から生まれ、その後、孤独な個人の心を扱う、綿密かつ意識的な心理ドラマとなった。粉職人、娘、狩人の3名による配役詩は「プロローグ」と「エピローグ」によって枠構造を成し、シュレーゲルの「ロマン的イロニー」の文学理論を踏まえた作品だったが、作曲家シューベルトの関心は恋物語にあったので、こうした部分は省略されてしまったという。この作品につけられた副題「冬に読むこと」は、「国家や官僚が絶対的な力をもつ凍てついた社会的気候の隠喩」であり、そこにはカールスバード条約後の政治的弾圧の中をいかに生きるかという意味合いが込められていたという記述に、筆者は蒙を啓かれる思いだった。

巻末の「ヴィルヘルム・ミュラー 小詩集」には、彼が生涯で書いた783編の詩のなかから重要な詩作品が厳選されて収められている。ミュラーはゲーテとティークを崇拜し、ウーラントの叙情詩を最も美しいドイツ民謡として賞賛し、理論でも実作でも、簡素な形式で歌うような韻律をもち、言葉遣いは自然で、深い内面性を宿す作品を求めている(66頁参照)。訳詩にはそんなミュラーの芸術観が反映されており、音読すると、リズムや音を通して、あのハイネをして「ゲーテは別格ですが、あなたほど私の愛する歌謡詩人は他にはいません」と言わしめた詩人ミュラーの世界がくっきりと浮かび上がる。

ミュラーと他の詩人たち、すなわちシャミッソーやハイネ、ベランジェとの比較は特に興味深く示唆に富み、読者にさらなる考究をうながす。全編の要所に配された41点の図版も情趣に富み、折りに触れて手に取りたい書である。